

第 21 回 展 示

**文学部・文学研究科のあゆみと挑戦**

展 示 期 間   ： 2007(平成19)年12月 ～

展 示 場 所   ： 学術情報総合センター1階

大阪市立大学   大学史資料室

## 文学部・文学研究科のあゆみと挑戦

新制大阪市立大学の発足（1949年4月）にともなって設置された法文学部から、1953年4月に文学部は分離独立した。以来、54年幾多の曲折を経ながら今日の発展を築いてきた。その歩みを振り返って、将来を見通していきたい。

文学部は、当初、全体が文学科1学科でその中に10専攻をおき、翌年教育学専攻が加わり、11専攻となった。文学部の発足と並行して、大学院修士課程（当初6専攻）が設置され、2年後には博士課程（当初7専攻）が設置される。

その後文学部は徐々に充実した結果、1968年4月に11専攻を5学科（哲学科、人間関係学科、史学地理学科、国文・中文学科、西洋文学科）にわけ、史学専攻には3コース（国史・東洋史・西洋史）をおく体制に再編された。この頃には、大学院は西洋史を除く12専攻の博士課程が実現していた。

文学部が、大きな変動にさらされたのは、1990年代の大学設置基準の大綱化に伴う教養教育の再編であった。大阪市立大学は、もともと教養学部をもたず、各学部が協同で担当する体制であったが、教員定数の再配分を伴う再編を余儀なくされたのである。その際、教養教育の比重の大きかった文学部と理学部への影響が大きくならざるをえなかった。これと並んで、大阪市立大学全体が都市型総合大学をめざし、大学院重点化をはかっていく方向が打ち出されてくる。

こうした環境変化を受動的に受けとめるのではなく、積極的に文学部の新しい方向を模索していく。1998年4月には、学部第1部を3学科（哲学歴史学科、人間行動学科、言語文化学科）15コースに再編し、言語情報コースと表現文化コースを新たに設置する（第2部は3学科12コース）。続いて2001年4月には、大学院を3学科の上に立つ3専攻（15専修）に再編するとともに、新たにアジア都市文化学専攻を設置し、文学研究科を部局とする体制に移行した。このとき、これまで欠けていた西洋史分野についても西洋史学専修を設けることができた。

これまでの伝統的な学問分野を基礎にしつつ、都市文化研究に比重をおく方向にカーブを切ったのである。その基礎には、これまでに培われてきた文学部の地域調査の伝統も存在していた。たとえば人間行動分野では、地理学教室が早くに富山県礪波地方の散村の総合調査を行っており、最近では、社会学・地理学協同での大阪市の大規模なホームレスの現状調査を実施してきた。また、日本史分野では、1950年代に難波宮発掘に先鞭をつけ、近年では和泉市をフィールドに歴史的な総合調査に取り組んでいる。

こうした取り組みを踏まえ、2002年に「都市文化創造のための人文的研究」というテーマで、21世紀COEプログラムに採択されたのである。この研究プロジェクトは、文学部創立50周年のさまざまな記念行事と連動して、企画が進められた。その結果、研究科内に都市文化研究センターが設置され、またアジア各地にそのサブセンターをおくことができたのである。

現在、大学全体として大きな変動は継続中である。その中で、文学研究科はこれまでの蓄積を踏まえつつ、新たな方向をさらに追求しているのである。



## 展示資料について

今回の展示は、「Ⅰ 文学部のあゆみ」・「Ⅱ 地域調査の伝統」・「Ⅲ 文学研究科の現在」の三つのコーナーから構成されている。各コーナーには、以下のような資料を展示している。

### Ⅰ 文学部のあゆみ

1949年の大阪市立大学（新制）の発足にともなって法文学部ができてから、59年。1953年に、法学部と分かれて、文学部として正式にスタートしてからでも、55年という時間が流れた。ここでは、年表【大阪市立大学文学部・文学研究科の歴史】で、その間のあゆみを簡潔に振り返るとともに、1950年代から60年代初めにかけての、初期の文学部のようなすを窺ってみよう（年表は、後掲）。

・大阪市立大学法学部文学部設置認可申請書

・1954（昭和29）年度の履修概要

文学部が設置されて2年目の履修概要。当時は、商学部・経済学部・法学部と一冊で作成されていた。発足時の文学部の専攻領域が見える。

・1953（昭和28）年度の時間割（学部）

#### 【写真1】

設立当初（第1年目）の時間割。現在と比べると科目数も少なく、すべての科目が1枚に収まっている。

・1955（昭和30）年度の時間割と履修概要（大学院）

文学部発足に続いて大学院も整備されていく。これは、初期の大学院の時間割であるが、まだガリ版刷りであり、手作りの雰囲気がある。

・文学部発足のころの卒業論文

当時から現在まで、“文学部にはいった意義は卒論に集約される”ことは変わらない。当時の卒業論文は手書きである。たとえば表紙に見える工夫にも、学生一人ひとりの思いが込められている。また、教員の読了印にも学生の成長をみまもる視線が感じられる。

・博士論文第1号（1964年3月）

大学院に博士課程が設置され、博士の学位を授与できるようになる。その最初の博士号を取得したのが、中川喜代子さん（社会学専攻）の「非長子相続制の研究」であった。女性の博士号取得が少なかった当時のこと、快挙として新聞にも大きく報じられた。

・（写真）1960年代の授業風景、かつての教授会風景 ほか

【写真1】 1953年度の時間割（学部）

## II 地域調査の伝統

文学部・文学研究科には、4人もの学士院賞受賞者を輩出するなど（年表参照）高いレベルでの人文学の伝統が息づいている。一方で、難波宮の発掘に生涯をかけた山根徳太郎氏をはじめとして研究室を出た地域調査の伝統も流れている。ここでは、そのうち教室や専修の共同で実施された地域調査の取組みを紹介しよう。

### 1) 富山県礪波散村・五箇山山村共同調査

地理学教室創設者の村松繁樹教授を中心に教員・学生が共同でフィールド調査を行った。共同調査の試みと、カード方式によるデータの整理と共有の成果は、当時の学界で高い評価を得た。インテンシヴなフィールドワークの伝統は現在に受け継がれている。

礪波散村調査 鷹栖村（1952～1955年）、庄川扇状地（1955～1956年）  
五箇山山村調査 平村（1953～1954年）

- ・調査データを記したカード（21枚）【写真2】
- ・「砺波の散居村調査」の紹介記事（コピー）（「砺波市広報 No.4」昭和29年7月20日）
- ・調査報告書

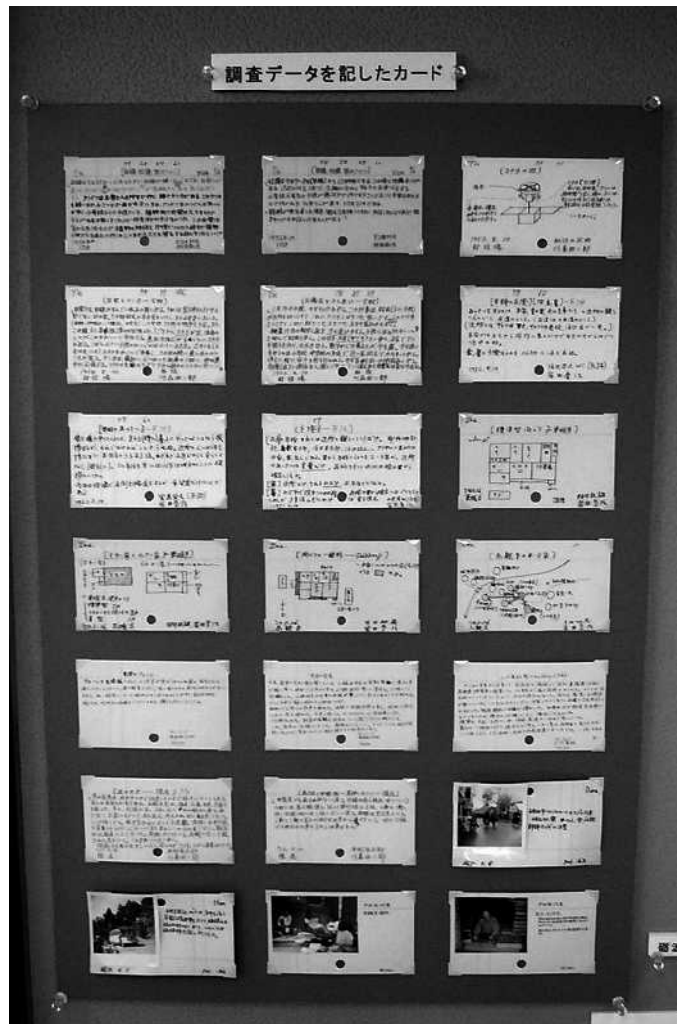
①礪波散村：『人文研究』第5巻9号、1954年

②五箇山山村：人文地理学会編『地域調査』柳原書店、1955年

・（写真）東礪波郡福野小学校での記念写真（1956年）、五箇山・平村役場付近の風景（1954年）

### 2) 大阪市のホームレス（野宿生活者）調査

社会学教室は、都市に関係した社会調査をずっと行っているが、1990年代にホームレス（野宿者）が急増した状況を踏まえ、大阪市からの委託を受け、平成10年度から11年度にかけて、「大阪市内における野宿生活者（ホームレス）の概数・概況調査」「野宿生活者に関する市民意識調査」、「臨時宿泊所利用者聞き取り調査」、「野宿生活者（ホームレス）聞き取り調査」、「大阪市内観光施設におけるビジター調査」を実施した。これこれらはホームレス問題に関する総合的な学術調査として評価が高い。



【写真2】調査データを記したカード

- ・大阪市立大学文学部社会学教室の主な研究調査実習リスト
- ・社会学教室が実施した大阪市の調査結果についての新聞記事（コピー）  
（「毎日新聞 2000年2月17日」、「朝日新聞 2000年2月22日」）
- ・1999年野宿者聞き取り調査のフィールドノート（コピー）
- ・1999年野宿者聞き取り調査の調査票（見本）
- ・調査報告書
- ① 1995年度「社会学実習」『大阪市民の野宿者に対する意識調査』1996年
- ② 1996年度「社会学実習」『大阪における野宿者と高齢日雇労働者』1997年
- ③ 2000年度「社会学実習」『野宿生活者と話す』2001年
- ・（写真）野宿者への聞き取り調査

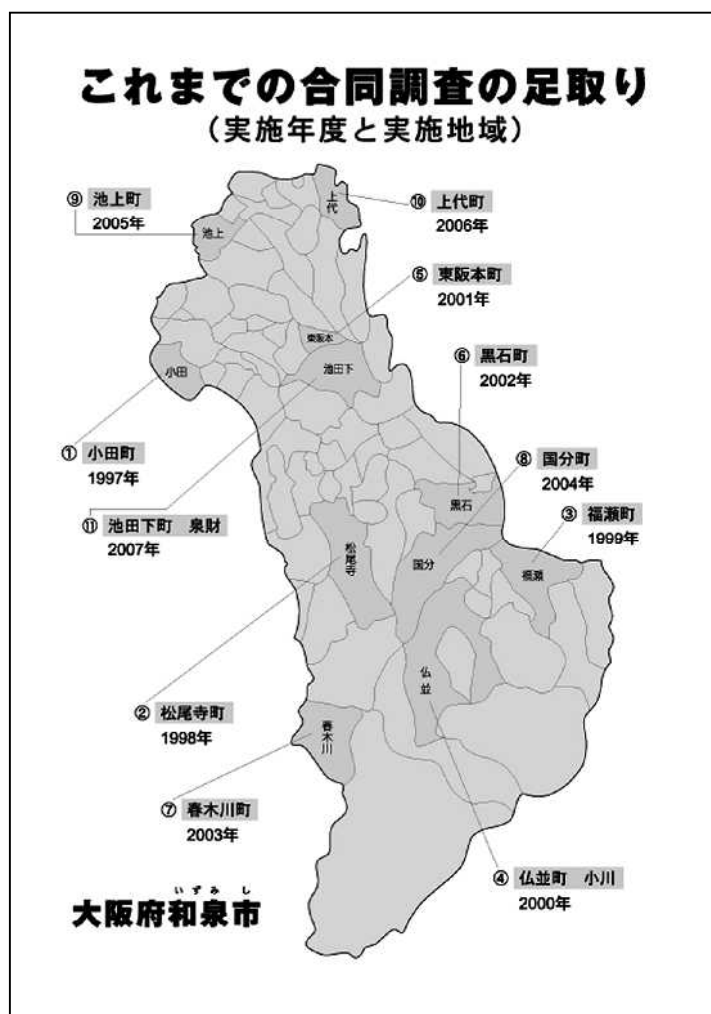
### 3) 和泉市地域の歴史的総合調査

日本史研究室では、1997年以来、毎年夏に和泉市教育委員会との合同で「地域の歴史的総合調査」を実施してきた。それは、一つの町会（ほぼ江戸時代の村・明治以降の大字に相当）を単位として、時代をこえて古文書調査、聞き取り、フィールドワークなどにより総合的な調査を行なうものである。これまで、11回にわたって11ヶ所において調査を実施してきた。そのうちには、山間の小さな集落（小川）で全戸に聞き取りを行ったり、集落（黒石）

内にある古墳を測量したり、また生活科学研究科の建築学教室の民家調査と連携したこともあるが、その中心は、①古文書の現状記録調査、②地域の人びとからの聞き取り調査、③現地の地形・遺物などを確認するフィールドワーク調査の3つである。

この合同調査は、5月ころに教員・大学院生・学生から実行委員会を作って、準備に入り、夏の2泊3日の合宿調査、秋からの調査報告書（毎年5月発行の『市大日本史』に掲載）作りと年間を通した取組みとなっている。また、この調査で見いだされた史料を秋学期の講読や演習のテキストとすることも見られ、日本史研究室の教育体制とも深く関わっている。

- ・これまでの合同調査の足取り（実施年度と実施地域）【図1】



【図1】これまでの合同調査の足取り

・第2回松尾寺地域での合同調査の紹介

調査対象の松尾寺は古代以来、続く古刹。中世の古文書を多数残す稀有な地方寺院として著名。

- ・松尾寺所蔵史料の現状記録シートと史料目録シート
- ・成果報告書

① 『松尾寺地域の歴史的総合調査研究』（和泉市史紀要第5集）

② 『市大日本史第10号』2007年5月（第10回合同調査 上代町）

- ・（写真）史料の現状記録調査、聞き取り調査、フィールドワーク調査 ほか

### Ⅲ 文学研究科の現在

文学研究科は2001年に大学院の再編・部局化、2002年に21世紀COEプログラム採択、2003年に創立50周年記念事業を行なった。ここからは21世紀を迎え、大きく変貌しつつある文学研究科を紹介しよう。

#### 1) 文学研究科の21世紀COEプログラム

平成14年度から文部科学省は、世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを推進するために、「21世紀COEプログラム」を実施している。

21世紀COEプログラムでは、学問分野を10分野に分け、それぞれ10～30の研究教育拠点を選ぶこととなっていたが、文学研究科は人文科学分野において「都市文化創造のための人文科学的研究」をテーマとして採択された。

COE採択を受けて、文学研究科は研究教育拠点として都市文化研究センターを平成14年10月に設置した。それ以来、都市文化研究センターは、海外の6都市にサブセンターを置いて、国際的に都市文化の研究を進めている。

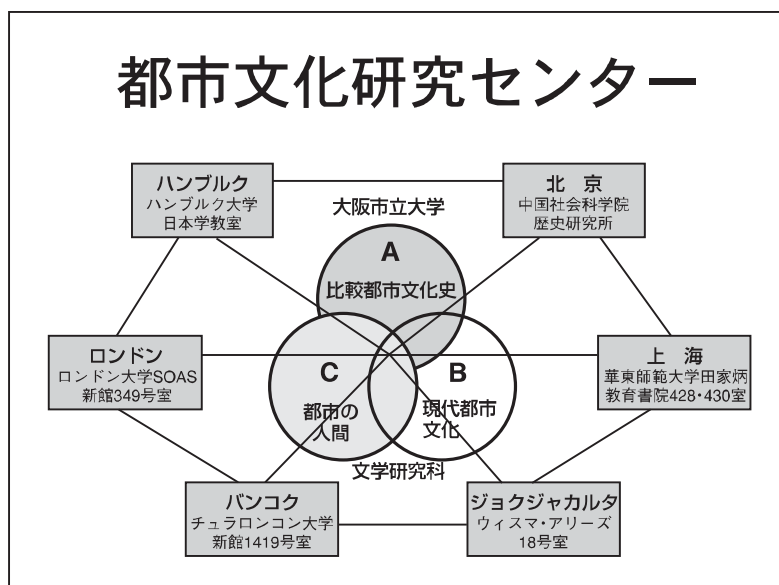
・都市文化研究センターと海外サブセンター（組織図）【図2】

- ・COEウィークスポスター（文化遺産と都市文化政策）、パンフレット

都市文化研究センターの活動のひとつのまとめとして、2006年9月～10月に国際シンポジウム・市民講座など多彩な催しを開催した。

・成果刊行物

都市文化研究センター・サブセンターの研究成果は、文部科学省の支援を受けた5年間で76点に上る。うち英語で刊行されたものが



【図2】都市文化研究センターと海外サブセンター

12点、中国語が11点。都市文化研究センターの活動は国際的にも高く評価されている。

- ① 機関誌『都市文化研究』
  - ② 『東アジア近世都市における社会的結合－諸身分・諸階層の存在形態－』清文堂、2005年3月
  - ③ 『中日学者論中国古代城市社会』三泰出版社、2007年3月 ほか
- ・申請書（拠点形成計画調書）  
文学研究科は「都市文化創造のための人文科学的研究」をテーマとして応募した。
- ・審査結果表  
文学研究科は全国16大学20研究拠点のひとつに選ばれた。
- ・(写真) 上海サブセンター、バンコクサブセンター ほか

2) 文学部は半世紀にわたる歴史と伝統のうえにたって、新たなる飛躍をめざし、大学院文学研究科を部局とした。

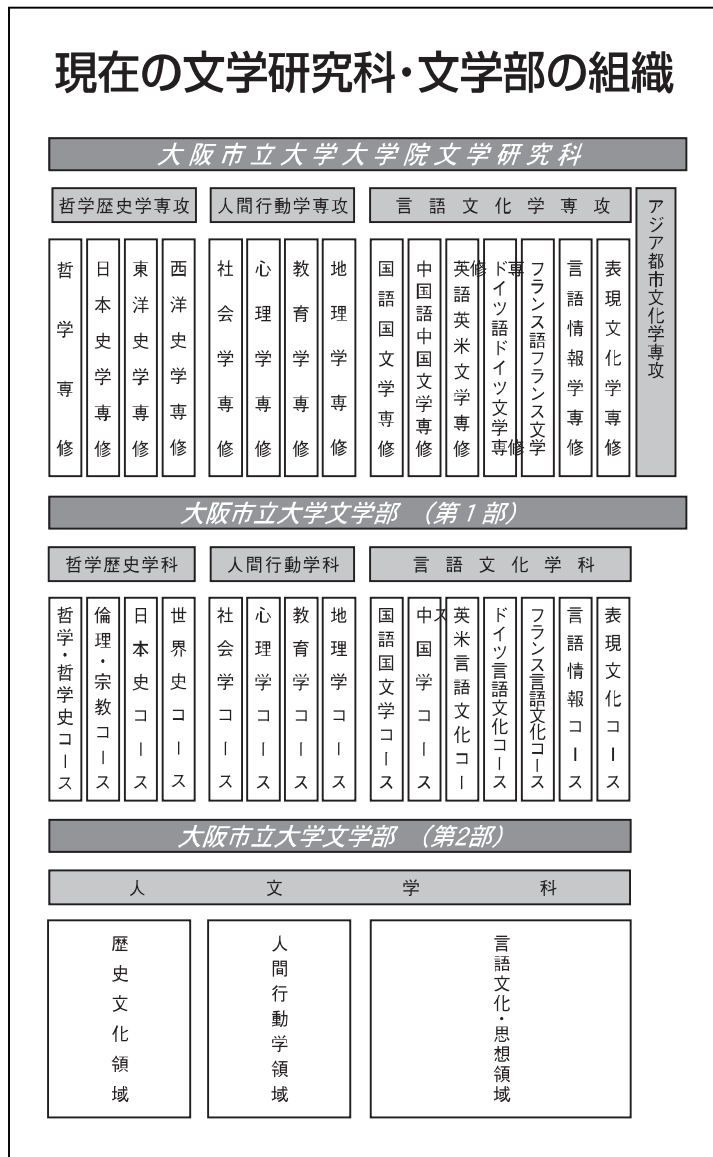
アジア都市文化学専攻——文学研究科改組の中核

文学研究科は2001年度に大学院重点化と併行して改組を行った。その中核となったのがアジア都市文化学専攻の新設である。アジアに開かれた都市大阪に立地するわが大学の文学研究科が果たすべき学問的使命はここにあるとの自覚から設置された。翌年9月27日～29日に、専攻新設を記念して国際シンポジウム「アジア都市文化学の可能性」が開催された。その成果は大阪市立大学文学研究科叢書の第一冊として公刊された。

・組織図「現在の文学研究科・文学部の組織」【図3】

文学部創立50周年記念国際シンポジウム「再発見 都市大阪のこころと文化」

2003年7月、文学研究科・文学部は創立50周年を記念し、都市大阪の風土と文化と精神を再発見するこころみとして国際



【図3】現在の文学研究科・文学部の組織

シンポジウム「再発見 都市大阪のこころと文化」を朝日新聞との共催で開催した。パネリストとしてコロンビア大学名誉教授ドナルド・キーン氏、ハンブルグ大学教授ローラント・シュナイダー氏、国際日本文化研究センター所長の山折哲雄氏、東大寺管長の橋本聖圓氏をパネリストに招き、阪口弘之文学研究科教授の司会で活発な討論が行われた。パネリストはいずれもわが文学研究科とゆかりの深い方々であり、大学内外から集まった多くの聴衆に都市大阪の再発見の意義と重要性を訴えた。

・国際シンポジウム「再発見 都市大阪のこころと文化 なにわ文学脈々」新聞記事コピー（朝日新聞 2003 年 7 月 27 日）

・成果刊行物

大阪市立大学文学研究科叢書

①『アジア都市文化学の可能性』清文堂、2003 年 3 月

②『都市の異文化交流－大阪と世界を結ぶ－』清文堂、2004 年 3 月

・(写真) 国際学術シンポジウム「アジア都市文化学の可能性」ほか

3) 国際化の時代、また社会的な貢献が求められる時代、文学研究科は、インターナショナルスクールや上方文化講座など新しい試みに挑戦している。

インターナショナルスクールとは

インターナショナルスクール（集中科目）は、平成 15 年度に、「都市文化研究センター」（文科省 COE 事業拠点）の活動の一環として、文学研究科・文学部の授業科目としてスタートした。講師は世界各地から招聘した著名な研究者である（毎年 3～7 名）。平成 17 年度からは、(1) 集中講義のうち、外国人講師ひとりが 1 日分（4 コマ）を担当する、(2) 午前中は講師が英語で講義する、(3) 英語の講義に同時通訳をつける（神戸女学院大学現代 GP の協力）、(4) 午後は 1 日あたり 3～4 名の都市文化研究センター研究員や院生・学生が英語で研究成果を発表する、(5) 外国人講師がコーディネータを務めて参加学生の間で討論を行い、発表について助言を行う、という形式が確立し、今年（2007 年）度に至っている。

この活動を基礎として、平成 19 年度「文部科学省大学院教育改革支援プログラム」（大学院版 GP）に「国際発進力育成インターナショナルスクール」が採択された（平成 21 年度まで）。

・成果報告書

①『The Horizon and Focus in Urban Cultural Theory』（The International School Program 27-29 Sep.2005）

②『Challenges for Urban Cultural Studies』（The International School Program 26-28 Sep.2006）

・(写真) 外国人講師の英語による講義風景 ほか



## 上方文化講座とは

上方文化講座は2004年度より開設された文学部の特別授業科目である。大阪の地に歴史的に育まれた文化、わけても伝統芸能「文楽」に光をあて、学問的体系のもとに学ぼうとするものである。

その第一の特色は、文楽界の中核を担う名手、竹本津駒大夫（太夫）・鶴澤清介（三味線）・桐竹勘十郎（人形遣い）の三師を学外非常勤講師としてお招きし、文学研究科スタッフとの共同作業により授業を組み立てていく点にある。さらに第二の特色として、それが文学部の正規の授業科目であるとともに、一般市民にも公開して行われる点を挙げることができよう。

大阪市設置の公立大学に相応しい、教育・研究・社会貢献の三者が一体となった事業として、従来の公開講座の類とは一線を画した内容を有している。

これまでに取り上げた作品は以下の通り。

2004年度『曾根崎心中』、2005年度『国性爺合戦』、2006年度『冥途の飛脚』、  
2007年度『菅原伝授手習鑑』

・第1回講座「曾根崎心中」について報じる新聞コピー（日本経済新聞文化欄2004年11月13日夕刊）

・第4回講座「菅原伝授手習鑑」のちらし

・成果刊行物

①『上方文化講座 曾根崎心中』和泉書院、2006年8月

・（写真）「曾根崎心中」【写真3】



【写真3】上方文化講座「曾根崎心中」

## 【大阪市立大学文学部・文学研究科の歴史】

1949（昭和24）年4月	大阪市立大学（新制）創設 商学部、経済学部、法文学部、理工学部、家政学部
7月	文学会発足
9月	法文学部教授会が文学部による大阪の実業家・森繁夫氏蔵書約12000冊購入を決定（現・学術情報総合センター森文庫）
11月	『人文研究』文学会より創刊
1950（昭和25）年4月	商・経・法文の各学部に第二課程（夜間課程）を設置
1953（昭和28）年4月	法文学部を法学部と文学部に分離、文学部文学科（10専攻）を設置 大学院文学研究科修士課程（6専攻）を設置
1954（昭和29）年4月	大学院文学研究科修士課程に6専攻を増設
5月	教授会構成員を文学部教員全員とする 教室会議を公的組織とする
1955（昭和30）年4月	大学院文学研究科博士課程（7専攻）を設置
1957（昭和32）年12月	文学部同窓会結成
1960（昭和35）年6月	文科系研究室棟（現文学部棟）竣工
1963（昭和38）年6月	天野元之助 教授（東洋史学）『中国農業史研究』で日本学士院賞受賞
1964（昭和39）年3月	文学研究科課程博士第1号（社会学・中川喜代子氏）
1965（昭和40）年5月	小島憲之 教授（国文学）『上代日本文学と中国文学』で日本学士院恩賜賞受賞
1968（昭和43）年4月	文学科を廃止し、哲学科、人間関係学科、史学地理学科、国文中文学科、西洋文学科の5学科11専攻を設置 専攻所属を2回生からとする
1969（昭和44）年5月	文科系研究室棟の全体が封鎖される
10月	機動隊により杉本町地区全館の封鎖解除、授業再開
1971（昭和46）年4月	学部カリキュラム改訂、選択必修科目を設定
1975（昭和50）年4月	修士課程を前期博士課程、博士課程を後期博士課程とする
1979（昭和54）年6月	佐藤武敏 教授（東洋史学）『中国古代絹織物史研究』で日本学士院賞受賞
1983（昭和58）年11月	文学部創立30周年記念講座開講（文化交流センター） 文学部創立30周年記念講演会・祝賀会開催（田中記念館） 『大阪市立大学百年史 部局編』（『文学部三十年史』）刊行
1994（平成6）年11月	文学部増築棟竣工
1995（平成7）年8月	文学部棟大規模改修が完了

1998（平成10）年4月	旧5学科を廃止し、哲学歴史学科、人間行動学科、言語文化学科の3学科15（第二部は12）コースを設置
2001（平成13）年4月 6月	文学研究科旧12専攻を廃止し、哲学歴史学（4専修）、人間行動学（4専修）、言語文化学（7専修）、アジア都市文化学の4専攻を設置 大学院部局化により正式名称が大阪市立大学大学院文学研究科・文学部となる 文学研究科教授会に博士論文審査会を置く 小林道夫 教授（哲学）『デカルトの自然哲学』で日本学士院賞受賞
2002（平成14）年6月 10月	チュラロンコン大学芸術学部（タイ）と学術交流協定を締結、以後多くの大学と学術交流協定を結ぶ 「都市文化創造のための人文科学的研究」が21世紀COEプログラムに採択 文学研究科内に都市文化研究センター（UCRC）を設置
2003（平成15）年3月 5月 7月 9月 12月	大阪市立大学文学研究科叢書1『アジア都市文化学の可能性』（清文堂）刊行 『都市文化研究』第1号を刊行 「大阪市立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構」発足 文学部創立50周年記念国際シンポジウム・祝賀会開催（大阪国際交流センター） 文学部創立50周年記念誌『明日への飛躍』刊行 インターナショナルスクールを開設 上方文化講座開設記念講演会「文楽BUNRAKU－大阪から世界への発信－」
2005（平成17）年4月	第二部旧3学科を廃止し、人文学科（3専門領域）を設置
2006（平成18）年4月	公立大学法人 大阪市立大学となる 第一部のカリキュラムを改訂
2007（平成19）年9月	文学研究科「国際発信力育成インターナショナルスクール」が文部科学省の「大学院教育改革支援プログラム」に採択

## 編集後記

今年度の大学史展示で文学研究科を取りあげることは、昨年度の運営委員会においてすでに予定されていた。その意味では早くから準備に取り組めたはずであった。しかし、実際の準備委員会の発足は7月にずれ込んでしまった。委員会は、谷富夫研究科長、山野正彦さん、井上浩一さん、山口久和さん、早瀬晋三さん、大場茂明さんと塚田で出発したが、展示内容が具体化していくなかで、大黒俊二さん、土屋礼子さん、添田晴雄さん、小林直樹さんにも参加いただくことになった。準備が本格化するのは、夏休みをはさんで秋になってからであり、間に合うのだろうかという不安もあったが、文学部・文学研究科の来し方を振り返り、行く末を考えるよい機会になったと思う。

結局、あわただしい準備になってしまい、大学史資料室の森英子さんと田中ひとみさんに多大なご苦勞をおかけしてしまうことになった。お礼を申し上げたい。

大学史資料室運営委員（文学研究科）塚田 孝

## － 過去の展示 －

	標 題	期 間
<b>1号館</b>		
第1回	大阪市立大学の歩み	1991.11.11～1992.7.15
第2回	クラブ誌にみる学生気質	1992.7.15～1993.1.6
第3回	学び舎を奪われた十年間 －杉本学舎接収の苦難－	1993.1.6～9.7
第4回	大阪商業講習所の誕生 －市大のルーツを探る－	1993.9.7～1994.4.8
第5回	自由主義者・河田嗣郎 －初代大阪商科大学長の人と思想－	1994.4.8～10.26
第6回	高度先進医学をめざして －市民と歩んだ医学部の半世紀－	1994.10.26～1995.5.2
第7回	家政学部（現・生活科学部）の誕生 －市立大学創設のひとこま－	1995.5.2～11.13
第8回	戦時下の大阪商科大学	1995.11.13～1996.5.30
第9回	工学部の源流 －大阪市立都島工業専門学校－	1996.5.30～10.11
<b>学術情報総合センター1階</b>		
第10回	大阪市立大学の創設と恒藤恭	1996.10.11～1997.5.28
第11回	理学部－歴史のなかの現在	1997.5.29～12.16
第12回	市民の大学をめざして －寄せられた支援と独自性の創造－	1997.12.16～1998.11.25
第13回	商学部・経済学部半世紀の歩み	1998.11.26～1999.10.18
第14回	市立大学の120年	1999.10.18～2000.12.13 (～2004.4.22 縮小して常設展示として併設)
第15回	保健体育科研究室の歩み	2000.12.19～2001.10.11
第16回	経済研究所 73年の歴史と新たな挑戦	2001.10.11～2002.11.12
第17回	学舎の記憶 －建築で辿る大阪市立大学の歴史－	2002.11.12～2004.4.22 (以降、「旧図書館 1/100模型」を常設展示)
—	(学術情報総合センターの展示「EU展」など)	(2004.4.23～8.5)
第18回	初代学長・恒藤恭の人と学問 －新資料と絵画・スケッチで描く－	2004.8.6～2005.8.8
第19回	法学部・法学研究科 53年の歴史と新たな挑戦	2006.2.1～10.31
—	(学術情報総合センター開設10周年記念展示)	(2006.11.1～12.13)
第20回	「論」の遺産 －いま、科学技術と社会のあり方を問う－	2006.12.14～2007.9.28
—	(「萬葉学の先達」展 学術情報総合センター・萬葉学会)	(2007.10.1～12.13)

**大阪市立大学 大学史資料室**  
 〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138  
 tel 06-6605-3371 fax 06-6605-3372